

Alibi
1961
by Harry Carmichael

目次

アリバイ 5

訳者あとがき 265

解説 谷口年史 268

主要登場人物

- ジョン・パイパー……………保険調査員
- クイン……………新聞記者。パイパーの旧友
- パトリシア（パット）・ウオーレン……………自称小説家。本名クララ・ワトキン
- スタンリー・ワトキン……………パットの夫
- アラン・ヘイル……………事務弁護士
- ウイニー・タッドフィールド……………パットの家政婦
- レグ・オーウェン……………酒場兼宿屋（ロイヤル・ジョージ）の主人
- ゴードン・クック……………開業医
- ミセス・ビルケット……………パットの元大家
- ジリアン・チェスタフィールド……………パットの友人
- クリフォード（クリフ）・ワトキン……………スタンリーのおじ
- フォックス……………クレセット生命保険会社部長
- ロック……………犯罪捜査課警部
- テッド・ウィーラン……………巡査

アリバイ

……夜の暗い手先どもが餌食を求めて蠢きだす

シェイクスピア『マクベス』第三幕第二場より

第一章

急勾配ののぼり坂を越えると、道は左にカーブしながら巨大な闇のかたまりと化したバーント・スタップの森の麓をまわり、ゆるやかに夕闇へと滑りこんでいく。ここ数週間ともに雨が降っていないせいで、道端の木々や生け垣は白くくすみ、ターンパイク・コーナーで暗渠に流れこむ排水溝には落ち葉が散り積もっていた。

起伏する農地の向こう、ひときわ暗い東の空に小さな光の粒が瞬いている。次のカーブを曲がると、聖ミカエル教会の尖塔のシルエットが、闇に溶けつつある夕景に浮かびあがって見えた。

その先の坂道をのぼりきれば、てっぺんから村の一部が見える。ダツシユボードの時計は十一時五分前を示していた……だが、その時計は少し進んでいる。ルースは家にいるだろうか、と彼は考えをめぐらせた。

……留守ならいいが……あるいはすでに眠っているか。そうすれば無理に言葉を交わさなくて済む……。

ふたりのあいだに話す価値のある話題があったのは、遠い昔のような気がする……。たぶん子どもがいれば違ったのだろう。とはいえ、妻がそのことで私を責めるのはお門違いというものだ。赤ん坊を失ったのは私の責任ではない……あれ以来、妻は私を寄せつけなくなった。

単調なエンジン音を響かせて車は走り、開いた窓から生ぬるい夜風が吹きこんでくる。空の低いところでひとときわ明るい星が輝いていた。起伏する農地の向こうにウイントリングム村の明かりがちらほらと見えた。

まもなく彼は家にたどりつき、顔を合わせるなりルースはたずねるだろう。楽しい夜を過ごしたのか、と……いつもそうたずねるように。

楽しかろうとなかろうと、妻にはどうでもいいことだった。もし彼が退屈だったと答えれば、どうして事務弁護士会の集まりなんかに出席するのか、と判で捺したように妻は言う。その後、ふたりに言うべき言葉はひとつも残されていない。

その昔、夫の行動や出会った人々に妻が関心を持っていたこともある。だが、いまは微塵もないし——これからもない。

……老いた妻を責めるのは公平ではないかもしれない。彼女はもうずいぶん長く生きてきた……。自らの母親に盲目的に尽くし、外の世界に背を向けて生きてきた女の行く末なのか。

月日は飛ぶように過ぎていく。子どもを失って一、二年は、妻はよく言っていたものだ。もうひとり産むには年齢をとりすぎてしまった、と。夫を手の届く範囲に寄せつけないようでは、子どもができる可能性など方にひとつもなかったが……ついでに言えば、四十手前の男はまだ充分に若く、広い意味において女性を必要としていた。

……義務とか道義的責任とかで語られる問題じゃない。私はほかの男たちが当然のごとく享受しているものを望んでいるだけだ……私にだって少しくらい人生を楽しむ権利があるはずだ。不動産の譲渡や遺言やつまらない訴訟とはべつの何かを得る権利が。依頼人が夫婦の問題を話し合っているとき、

弁護士の方が何を考えているかを知ったら、彼らはどう思うだろう……

長年にわたって夫を家具同然に扱ってきた妻が、夫に愛人がいると知るや、あたかもショックを受けたかのようにふるまうのは、実に奇妙でまったくもって不可解である。その手の女たちはルース同様、男はひとりの人間として扱うべきものであり、家賃を支払うだけの存在ではないことを理解していない。子どもが成長すると、もはや自分是用済みだと感じる男もいる。ルースの場合は実母が子どもの代わりだった……その母親もいまは墓のなかだ。

カーブを曲がるたびに闇は深まり、気温も下がっていくようだ。たぶん明日も暑くなるのだろう。そろそろひと雨来てもいい頃合いだ。天気が崩れる前にルースと休暇に出かけたほうがいいかもしれない……七月は例年雨が多いし……。

パーリーとゴッドストーンを結ぶ幹線道路をはずれたとき、ヘッドライトを点灯した。自宅までもう少し、あと四、五マイルといったところだ。十一時には着くだろう。帰ったところで楽しみなどひとつもないが。

……たぶん最後のブランデーは断るべきだったのだろう。酒が過ぎると気が滅入るのはいつものことだ……とはいえ、酔っているわけではないし酔いを感じることもさえないが。たかだかブランデー三杯とリシユブルー一杯を食事のあとに飲んだだけだ。

おそらく自分が必要としているのはそれだ。もっと早く気がつけばよかった。近いうちに徹底的に飲んで酔っぱらおう。そして自制心の籠たがをはずすのだ。みんなやっていることだ——街で夜を明かし、愉快的時間を過ごす連中もいる。コールガールと会う手はずを整えるのだから難しいことじゃない……。

彼の思考はそこで完全に停止した。その手のことが不得手であることは自覚していた。きつと自尊心が高すぎるのだ……あるいは単に勇気が足りないのか。いずれにしろ見知らぬ他人と——一時間いくらで自分を売るような女と——一夜限りの情事に身を投じる気にはなれなかった。

それにしても、どうやって事に至るのだろうか？ 最初のとっかかりはひどくばつの悪い思いをするにちがいない……。ただベッドに行くというだけでは、彼の疑問に対する答えになっていなかった。

ヘイルは強いてほかのことに意識を向けた。明日はマクファーレン問題をめぐる審議会が開かれる。弁護士としての意見を求められるだろう。昼食前に裁判所から戻ったら……。

二百ヤードほど前方で道は二手に分かれ、左はウイントリンガムへ、右はオックステッドへと至ることを示す標識が立っている。車のヘッドライトが、両手を広げた格好の標識と、Y字路の股の部分に繁茂する野ばらを照らした。

村までは、そこからさらに二マイルある。わずかに明るさを残す空を背に、黒くにじんだ村の輪郭がぼんやりと見えた。唯一の街路灯が村の入り口を煌々と照らし、曲がりくねった道は二十軒ほどの家々のあいだを通ってロング・ホートンへ続いている。

村のはずれに彼がルースとともに生活を営む家が——営むふりをしている家がある。とうの昔に意味を失った儀式を続ける人々のように。

……残念だ……愛のある温かな家庭を築けたはずなのに。ふたりが似た者同士でなかったら……切れた絆を結び直す方法を見つけられたら……。どちらかが死ぬまでこんな生活をずると続けるのだろうか。妻の身に何か起きたら自分はどうか感じるだろう。自由の身となって人生をやり直せるとしたら何をするだろう……

白っぽいものが標識の近くに見えた——車のヘッドライトがY字路の合流地点をかすめた瞬間、それは動いた。白いドレス、もしくはコートを着た女のようだ。近づくとつれて、女が彼に合図を送っていることがわかった。

このまま走り去るべきだ。とっさにそう直感したことをヘイルはあとになって思いだし、その直感に従わなかったことをおおいに悔やんだ。彼のような立場にある男が、見知らぬ女の手招きにに応じて車を停めるなんて愚の骨頂だ……とりわけ深夜に……しかもウイントリンガムから二マイルしか離れていない場所で。ウイントリンガムはやたらと風通しがよくて、根も葉もない噂話があつという間に広まるのだ。

しかしそのときの彼は、そうした事なかれ主義的な態度に腹を立てていた。車を停めて事情を訊き、求めに応じて車に乗せてやったとして、いったいどんな不都合があるというのか。こんな夜更けに、ひとけのない田舎道に女をひとり残して走り去るのは正しいことではない。

ヘイルは速度を落とす、標識の前で車を停めた。すでに彼の目は、しなだれかかる満開の野ばらを背に、草で覆われた土手に座る女の姿をとらえていた。ひんやりとした闇のなか、聞こえるのは車の低いエンジン音だけだった。

彼は女に声をかけた。「何かお困りですか？」

女は苦勞して立ちあがると、ぎこちなく一歩踏みだして標識につかまった。「助けてもらえないかしら。実は足をひねってしまつて……歩くことができないの。迷惑でなければ……」

「もちろん、構いませんよ」ヘイルは運転席のドアを開けて、すばやく車から降りた。「どちらにお住まいですか？」

「このすぐ先の——ホルムウッド・コテージよ。ここから三、四百ヤード行ったところにある……」
女は身体をひねってオックステッドへ至るひとけのない道を指さし、その拍子によろめいた。

間一髪のところ、彼は女を抱きとめた。「私につかまって。痛めた足首に体重をかけないように。それで、力を合わせてきみを車に乗せるとしよう」

彼女は唇を噛んで足首をさすった。片方しか靴を履いていなかった。

片腕を彼の肩にまわし、背筋を伸ばすと、苦い笑み浮かべて言った。「馬鹿なことをしたわ。バスを降りたあと、道端の小石を踏んでしまったのね。靴のかかところが折れて、危うく足首まで折るところだった。あなたが通りかからなかったら途方に暮れていたところよ」

靴はハンドバッグと一緒に土手の上に置いてあった。華奢な白いハイヒールは、田舎道を歩くために作られたものではない。かかところが折れて、爪先にひっかき傷がついている。それでもなお、魅力的な脚にふさわしい魅力的な靴であることに変わりなかった。

……ルースも昔はよくこんな靴を履いていたものだ。ルースよりこの娘の脚のほうが魅力的だが……スタイルもいい。段違いに。しかも若い——かなり若い。たぶん二十代半ばだろう……」

昔から憧れていたタイプの女だった。彼の身近にいる女はたいいてい妻に似ていた——金髪で、精彩がない女たち。見た目はどれも似たり寄ったりで、温もりや情熱といったものをまるで感じさせなかった。

目の前にいる女は、彼がかつて出会ったどの女とも似ていなかった。幅の広い二重たえが印象的な目もと、高い頬骨、ルースなら肉感的と言ひ表しそうな唇。黒い髪はつややかで、肌は内側から発光しているみたいに輝いて見える。

〔著者〕

ハリー・カーマイケル

本名レオポルド・ホーレス・オグノール。1908年、カナダ、モントリオール生まれ。英国内でジャーナリストやエンジニアとして働き、51年にハートリー・ハワード名義で“The Last Appointment”を発表し、作家デビュー。二つのペンネームを使い分け、生涯に85作のミステリ長編を書いた。79年死去。

〔訳者〕

水野恵（みずの・めぐみ）

翻訳家。訳書にJ・S・フレッチャー『亡者の金』（論創社）、ロバート・デ・ボード『ヒキガエル君、カウンセリングを受けたまえ。』（CCCメディアハウス）、ロバート・リテル『CIAカンパニー』（共訳・柏艸舎）などがある。

アリバイ

——論創海外ミステリ 204

2018年2月20日 初版第1刷印刷

2018年2月28日 初版第1刷発行

著者 ハリー・カーマイケル

訳者 水野恵

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1688-3

落丁・乱丁本はお取り替えいたします